

情報 (所内研究報告 (人口))

「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築」¹⁾
(平成28年度～令和2年度) について

釜野 さおり*

I 研究の背景と目的

本プロジェクトは、人口学領域と性的指向・性自認のあり方 (sexual orientation and gender identity, SOGI) に関する研究との融合を図る必要があるという問題意識から出発した。性的指向 (性愛感情がどの性別に向くか) には、異性愛、同性愛 (レズビアン, ゲイ), 両性愛 (バイセクシュアル) が含まれる。性自認のあり方には、生まれたときに割り当てられた性別 (出生時性別) に違和感をもたないシスジェンダーや、自分をどの性別と思うか (性自認) が出生時性別と異なる、あるいは違和感があるトランスジェンダーが含まれる。

従来の人口学は、ほかの学問領域と同様、人々は異性愛者・シスジェンダーであることを前提としてきた。日本においてレズビアン, ゲイ, バイセクシュアル, トランスジェンダーなどの性的マイノリティを扱う研究をみると、2011年頃から研究書が相次いで出版され、それまで積み上げてきたものが可視化されるようになった〔三部2016〕。しかし人口学においては、筆者がレビューを行なった2011年時点でも〔釜野2011〕、現在でも、該当する研究は皆無に等しい。セクシュアリティが出生、移動、死亡などの人口学的アウトカムに影響することは諸外国の2000年代以降の

研究で明らかにされつつある〔Baumle (2013), p.3〕。SOGIと健康や経済状況との関連も示されている〔Aksoy, et al. (2018); Booker, et al. (2017)〕。しかしながら、日本の人口学ではSOGIを検討する研究がほぼ皆無である。研究が進まない大きな要因の一つは、性的マイノリティと異性愛者・シスジェンダーとの比較、すなわちSOGIによる比較を、一般化が可能な形で分析できるデータがないことにあると考え、本プロジェクトでは、人口学的属性としてSOGIをとらえる量的調査の土台を作ることを目指した。

II 研究計画

具体的な研究計画は次のとおりである。(a) 諸外国の公的調査でSOGIを扱うことに関して行われている議論ならびに先行研究のレビュー、(b) 調査票を用いた量的調査において、回答者の性的指向や性自認のあり方にかかわらず、回答しやすいSOGIをとらえる設問の検討、(c) 経済状況、健康状態、家族関係などのSOGIによる統計比較が可能なモデル調査票の作成、(d) モデル調査票を用いた市民全般を対象とする調査の実施可能性の模索、(e) (上記調査が実施できた場合) SOGIによる健康状態や経済状況等の比較分析の実施、(f) モデル調査票、特にSOGIをとらえる設問の評価。これらに加え、既存の調査にSOGIをとらえ

¹⁾ 本研究は、同課題名の科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) (基盤研究 (B)) として実施している (16H03709)。そのほかの成果については<http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/index.asp>、本稿で紹介した大阪市民調査についてはosaka-chosa.jpに詳しい。

* 国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部 第二室長

表1 出生時の性別でみた、性的指向の自認の分布

	全体	男	女
	(n=4,285)	(n=1,754)	(n=2,517)
	%	%	%
異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性だけに恋愛感情を抱く人]	83.2	84.5	82.7
ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性だけに恋愛感情を抱く人]	0.7	1.3	0.3
バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも恋愛感情を抱く人]	1.4	1.1	1.7
アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても恋愛感情を抱かない人]	0.8	0.3	1.1
決めたくない・決めていない	5.2	3.2	6.5
質問の意味がわからない	7.5	8.6	6.8
無回答	1.1	0.9	1.0
合計	100.0	100.0	100.0

注：出生時の性別が無回答であった14人は「全体」に含まれるが、個別の分布は省略。

る項目を含める働きかけを行うことや、同性カップル世帯を特定できる可能性のある設問を含む調査データ(国勢調査など)の二次利用による集計も、計画に含めている。

Ⅲ 研究成果の紹介

1 SOGI設問の検討とモデル調査票の作成

2017年秋に、調査票調査でSOGIをとらえる設問を検討するため、性的マイノリティと性的マイノリティでない人々の双方を対象としたフォーカス・グループ・ディスカッションやメールによるアンケートを行なった。先行研究を参考に設問候補を提示して回答してもらい、質問文や選択肢についての意見をたずね、それらを総合的に考慮して設問を決定した(性的指向の問いは下記3(1)を参照)。モデル調査票の調査項目には先行研究でSOGIとの関連が指摘されている事項や、分析の際に統制変数として必要なものを中心に選んだ。また、既存の調査で広く用いられている設問を積極的に採用した(調査票はhttps://osaka-chosa.jp/files/enquete_dossier.pdf参照)。

2 SOGIをとらえる項目を含めた無作為抽出調査の実施(大阪市民調査)

上記と同時並行でモデル調査票を用いた調査を企画した。本プロジェクトがSOGIの人口学の基盤作りを目標に掲げていることから、すでにこの

テーマでも行われているインターネット会社のモニタ登録者を対象とするウェブ調査や、誰でも回答できる形式のオープン型ウェブ調査ではなく、日本の公的調査や定評ある調査票調査で用いられてきた、無作為抽出による調査に挑戦すべきだと考えた。大阪市との長期にわたる調整を経て、住民基本台帳から無作為抽出した18~59歳の15,000人を対象に「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」(大阪市民調査)を2019年に実施することができた。調査は郵送配布・郵送回収(ウェブ回答可)によって行い、有効回収数は4,285(郵送3,300, ウェブ経由の回答985)票、有効回収率は28.6%であった。

3 大阪市民調査の分析結果

(1) 性的指向の自認の分布

本調査では、性的指向の自認(回答者本人が自分の性的指向をどのように認識しているか)を「次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください」とたずね、表1に示す選択肢を提示した。全体では「異性愛者」と回答した割合が83.2%で最も多かった。「レズビアン・ゲイ・同性愛者」または「バイセクシュアル・両性愛者」を合わせた割合は、全体では2.1%、出生時の性別が男(以下、出生時男性)では2.4%、出生時女性では2.0%であった。なお相対的に選択率が高かった「決めたくない・決めていない」および「質問の意味がわからない」の回答の背景を探るた

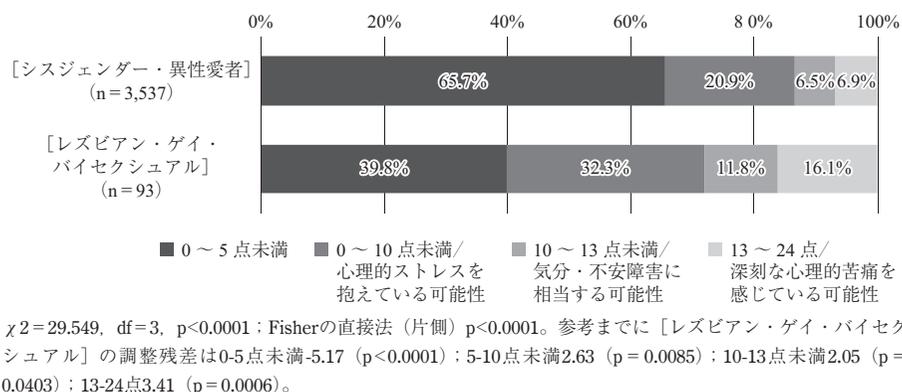


図1 性的指向別にみた、K6得点の分布

め、ウェブモニタを対象に「性的指向・性自認に関する設問の改善に向けた試験的調査」を2020年に実施し、一部の結果を公表した〔釜野他(2020)〕。

(2) 性自認のあり方にかんする結果

性自認のあり方については、出生時の性別(男/女)、今の認識が出生時の性別と同じか(同じ/違和感がある/別の性別)、今の認識(男/女/その他)の3問への回答から、「トランスジェンダー」と[シスジェンダー]を特定した。[トランスジェンダー]とみなしたのは、(a) 出生時男性で、出生時の性別とは「別の性別」または「違和感がある」と回答し、今の認識が「女」か「その他」の12人、(b) 出生時女性で、出生時の性別とは「別の性別」または「違和感がある」と回答し、今の認識が「男」か「その他」の20人である。

(3) SOGI別にみた、心の状態(K6得点²⁾)

大阪市民調査の目的の一つは、SOGIによる経済状況や心身の健康の格差を調べることであった。ここではその一例として、心の状態の指標と

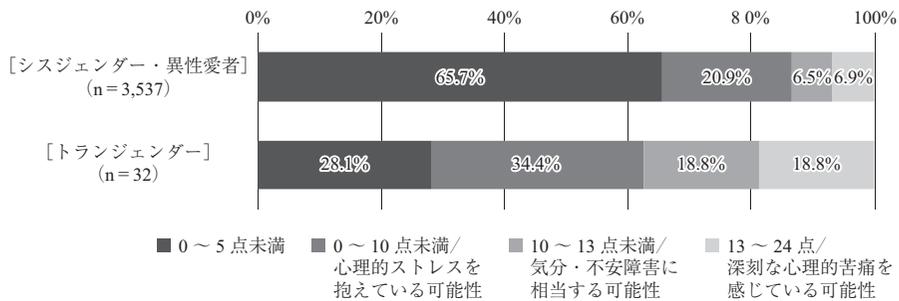
して広く用いられているK6得点を取り上げる。まず、性的指向について[シスジェンダー・異性愛者]と[レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル]を比べると、K6得点が5以上の区分の割合は、いずれも[レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル]の方が多かった。その中で「深刻な心理的苦痛を感じている可能性」を示す13-24点の割合に注目すると、[レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル]では16.1%で、[シスジェンダー・異性愛者]の6.9%の約2.5倍であった(図1)。

次に、[シスジェンダー・異性愛者]と[トランスジェンダー]を比較したところ、K6得点が5点以上の区分の割合は、すべて[トランスジェンダー]の方が多かった。その中で、「深刻な心理的苦痛を感じている可能性」を示す13-24点の割合は、[トランスジェンダー]では18.8%で、[シスジェンダー・異性愛者]の約3倍であった。

このように、性的マイノリティを含まない[シスジェンダー・異性愛者]の層に比べ、[レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル]も[トランスジェンダー]も、心の状態の良くないことが示された(図2)。

²⁾ K6得点は、「神経過敏に感じましたか」、「絶望的だと感じましたか」、「そわそわ、落ち着かなく感じましたか」、「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」、「何をやるのも骨折りだと感じましたか」、「自分は価値のない人間だと感じましたか」に対し、「まったくない」(0点)～「いつも」(4点)の間で回答してもらい、6項目の点数を合計したものである。

³⁾ クロス集計表において期待値5未満のセルが2あるため、カイ2乗検定および残差分析の結果は、参考として記載している。



$\chi^2=23.174$, $df=3$, $p<0.0001$: Fisherの正確確率検定(片側) $p<0.0001$ 。参考までに[トランスジェンダー]の調整残差は、0-5点未満4.44 ($p<0.0001$): 5-10点未満1.85 ($p=0.0638$): 10-13点未満2.05 ($p=0.0053$): 13-24点3.41 ($p=0.0089$)³⁾。

図2 性自認のあり方別にみた、K6得点の分布

IV 今後の展望

短期的な目標は、前述の2つの調査の分析を進めることと、SOGIをとらえる設問およびSOGIを含めたモデル調査票の改善である。長期的には、ほかの自治体や全国でモデル調査票を用いた調査を実施してデータを蓄積すること、既存の社会保障や人口問題にかかわる調査にSOGI項目を含めるように働きかけ、社会保障、家族形成、人口移動などの諸課題とSOGIの研究とを融合させていくことである。

※「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」および「性的指向・性自認に関する設問の改善に向けた試験的調査」は、国立社会保障・人口問題研究所研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号はそれぞれIPSS-IBRA#18003, IPSS-IBRA#19005)。

参考文献

- 釜野さおり(2011)「(学界展望)人口学とクィア・スタディーズ」,『人口学研究』第47号, pp.25-35。
- 釜野さおり他(2020)『性的指向における「決めたくない・決めていない」の回答を探る—性的指向・性自認に関する設問の改善に向けた試験的調査の結果より—』http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/20200701_Report_on_Undecided (2020年7月4日最終確認)。
- 三部倫子(2016)「日本におけるセクシュアル・マイノリティの「家族」研究の動向:2009年以降の文献と実践家向けの資料を中心に」,『家族研究年報』No.41, pp.77-93。
- Aksoy, Cevat G., Christopher S. Carpenter and Jeff Frank (2018) “Sexual Orientation and Earnings: New Evidence from the United Kingdom,” *ILR Review*, Vol. 71, No. 1, pp.242-272. <https://doi.org/10.1177/0019793916687759> (2020年6月22日最終確認)。
- Baumle, Amanda K. (2013) “Introduction: The Demography of Sexuality,” in Amanda K. Baumle ed., *International Handbook on the Demography of Sexuality*, Springer Netherlands.
- Booker, Cara L., Gerulf Rieger and Jennifer B. Unger (2017) “Sexual Orientation Health Inequality: Evidence from Understanding Society, the UK Longitudinal Household Study,” *Preventive Medicine*, Vol. 101, pp. 126-132.

(かまの・さおり)